令和８年度第２回伊賀市文化振興審議会議事録

■日　時　令和８年９月 25 日（金）午前 10 時～11 時 30 分

■場　所　伊賀市役所本庁舎４階 404 会議室

■委員

学識経験者		中川　幾郎	帝塚山大学名誉教授	出席
文化関係団体		滝川　博美	芭蕉翁顕彰会	出席
		吉輪　康一	伊賀市市民文化祭実行委員会	出席
		前出　昌一郎	上野合唱団	出席
公共的団体等	教育関係（小・中学校）	辻　晃子	校長会	出席
	福祉関係(保育･幼児教育)	中　恵	伊賀市社会事業協会	出席
	福祉関係	田邊　寿	伊賀市社会福祉協議会	欠席
専門知識を有する者	文化財関係	福田　良彦	伊賀市文化財保護審議会	出席
	産業関係	小坂　元治	上野商工会議所	出席
公募市民		服部　晶子		出席
		家城　円		欠席

事務局　[伊賀市地域力創造部]福岡部長、藤田次長
[文化振興課]藤島課長、杉永主幹、水谷係長、服部主任
[公益財団法人伊賀市文化都市協会] 山口課長

■内　容

１　あいさつ

２　報告事項

（１）令和７年度小中学生保護者アンケート結果・・・資料１

（２）吹奏楽部における地域展開の進捗状況・・・資料２

（３）ロゴマークについて

３　その他

■議事録

1　あいさつ

中川会長

・神戸市は、文化活動団体に毎年 6,000 万円の補助金を出しているが、その効果がみえないとの行政判断で廃止を通告した。原因は条例・市民との契約書である基本計画に審議会がないことである。

・条例に基づき設置された審議会において、政策評価をすることが重要である。

2　報告事項

（1）令和７年度小中学生保護者アンケート結果

事務局：資料１の説明

・アンケートを通して文化芸術体験は、子どもたちの反応や知的好奇心を育むうえで有意義であることを確認した。

・回答率の低下が課題。次年度より小学校６年生と中学校２年生において、保護者ではなく、直接、生徒に回答を求める。手法は学校でのタブレットによる回答を予定している。

（委員）母数である生徒の数は年々減少している、グラフは人数ではなく率で出してはどうか。

（事務局）率に改める。

（委員）児童・生徒のアンケート回答時には、子どもたちの文化体験を呼び起こす先生の助言が必要。子ども一人では回答できない。

（委員）アウトリーチ事業は学校への負担はないが、インリーチ事業は引率者の負担は気になる。

（事務局）送迎バスを 1 校 1 台出す予定で進めている。移動距離や帰りのスクールバスの時間調整など、移動時間が負担にならないよう調整している。

（委員）伊賀市内全小学校・中学校で必ず在学時に文化芸術体験ができるよう学校毎、学年毎の体験プログラムをつくるべき。音楽だけでなく、陶芸など幅広く体験できるなど協議は必要でないか。

（事務局）学校には、これまで取り組んでいる独自の文化芸術における授業や地域との連携もある。各校にアンケート調査を実施している。低学年や高学年など年代にあわせた体験プログラムを調整しながら文化都市協会がプログラムを作成している。
内容は音楽に限定せず、補助金事業を活用しながら充実させたい。

（事務局）学校ごとにプログラムがある。例えば、地域に陶芸家がいれば学校独自で陶芸を取り入れているなど、一定の地域性は必要であり、市や文化都市協会で決定はできない。

（委員）アンケートの趣旨を教えてほしい。

（事務局）事業を行う上で、子どもたちが文化芸術に関心を持ち、参画してもらうにはどうしたらよいか、総合的な視点で何が必要かを聞きとるためにアンケートを実施している。

（委員）メディア芸術について子どもたちがどう動いているか具体的に知りたい。

（事務局）勉強不足だが、アンケートに反映していきたい。

（委員）市内保育園では、園独自で地域の実情に応じた文化芸術体験を実施している。園の事情

によるバラツキはある。
（委員）親が興味を示さないと子どもも興味を示さない、だからこそ学校で子どもたちが文化芸術にふれる機会をつくる取り組みが必要である。
（委員）三重県の文化施設では、教員に引率された子どもたちは無料になっている。芭蕉翁記念館はどうか。
（事務局）芭蕉翁記念館も教員の引率であれば無料である。
（委員）アウトリーチのプログラムに関する演奏家等のマッチングシステムを整備するべきだ。
（委員）堺市では、アウトリーチ事業に参加希望する芸術家は専門家によるオーディションで合否を決める。参加条件には司会の訓練、語りの訓練と児童の権利条約に関する研修を受けることになっている。
（委員）学校で 2 次元コード読み込みのアンケートを行ったが回答率は下がり、紙で行ったほうが確実であった。学活の時間にタブレットで回答させたが、欠席者やタブレットを忘れる生徒がいて回答率をあげることは難しい。用紙で回答させるのが一番回答率を上げられる。

（２）吹奏楽部における地域展開の進捗状況

事務局：資料２の説明

・少子化により部活動が困難になってきている。2022 年のスポーツ・文化庁の持続可能な活動環境を構築するためのガイドラインが示され、教育委員会を中心にスポーツ・文化に親しめる環境を整えるため活動の地域展開を進めている。

・吹奏学部以外の文化系部活動は土・日曜は活動していないため、吹奏楽部が主になる。

・伊賀市は、拠点校で合同部活動を行う拠点校部活動を既に開始している。

・今後、先進事例自治体の視察、移行計画のロードマップの作成、公表を予定している。

（委員）地域連携は学校間連携としたほうが良い。また、地域連携を使うのであれば、三重県教育委員会定義と明記した方が良い。
（委員）なぜ、吹奏楽部の地域展開が問題になっているのか
（委員）吹奏楽部以外の文化系部活動は土、日曜の部活動がおこなわれていない。
（事務局）スポーツは地域に指導者がいて地域展開が進んでいる。吹奏楽部の地域展開において県内で、面積の広い伊賀市の参考になる事例がない。
平日の部活動は学校で教員が指導すれば良いが、土・日曜の部活動は地域展開できればと検討を進めている。
（委員）拠点校はどのように決まるのか。
学校の実情、各クラブの分布、地域での受け皿の有無を次回までに見える化してほしい。

（３）ロゴマークについて

事務局：

・伊賀市には芭蕉クンというキャラクターがあり、現在、市の魅力発信の軸となるよう、その活用を広く呼びかけている。新たにロゴマークを作成することは情報発信の統一を欠くことになる。

・市の職員全員が文化振興事業に取り組むために、いま一度クレジット「この事業は、伊賀市文化振興条例、伊賀市文化振興ビジョンに基づき実施しています。」の推進に注力したい。
・ロゴマークの作成は、一旦審議会の事項から外す。

（委員）新しくロゴマークを作成するより、芭蕉クンとクレジットの組み合わせで運用を考えてはどうか。